

加藤弘孝著

『唐中期浄土教における善導流の諸相』

——『念仏三昧宝王論』と

『念仏鏡』を中心に——』

法藏館 二〇二〇年二月刊  
A5判 x + 三二六二 + 一七頁 八五〇〇円 + 税

石川 琢 道

一 本書は、同時代・同分野を対象とする研究書として、塚本善隆『唐中期の浄土教』（初版一九三三年、増訂版一九七五年）以来の貴重な研究成果と言える。塚本氏が法照の研究を中心としているのに対し、本書は飛錫『念仏三昧宝王論』（以下『宝王論』と略す）ならびに道鏡・善道『念仏鏡』を中心としたものとなっている。目次は以下の通りである。

- 序 章―問題提起―
- 第一部 『念仏三昧宝王論』の思想史的研究
  - ―その統合仏教思想に着眼して―
- 第一章 『念仏三昧宝王論』研究史
  - ―飛錫の事跡に関連して―
- 第二章 『念仏三昧宝王論』の撰述年代

第三章 『念仏三昧宝王論』と飛錫遺文の関連性

―長安仏教界の動向を手がかりに―

第四章 『念仏三昧宝王論』と廬山慧遠崇拜

―往生伝の変遷と関連して―

第五章 『念仏三昧宝王論』に見える飛錫の修道論

―「無上深妙禪門」の概念を基軸にして―

第六章 『念仏三昧宝王論』諸本の系譜について

―その流伝背景と関連して―

第七章 浄土教典籍としての『念仏三昧宝王論』

第二部 『念仏鏡』の思想史的研究

―その人師信仰に着眼して―

第一章 『念仏鏡』研究史

第二章 『念仏鏡』の時代相―大行の事跡を基軸にして―

第三章 『念仏鏡』引用の「法王本記」

第四章 唐中期における善導観の特質

―『念仏鏡』の「誓願証教門」を中心に―

第五章 『念仏鏡』における対三階教姿勢

―善導と金剛の論争の事跡と関連して―

第六章 『念仏鏡』諸本の系譜―その流伝背景に着目して―

第七章 善導阿弥陀化身説の起点としての『念仏鏡』

終 章―唐中期浄土教史の再構築に向けて―

参考文献／あとがき／英文目次／索引

第一部は、著者が佛敎大学へ提出した平成二十五年年度学位請求論文（課程博士）『念仏三昧宝王論』の思想史的研究―その

統合仏教思想に着目して―」が元となっている。本書の刊行に際して加筆され、一部構成の変更がされているものの、基本的な内容は踏襲されている。第二部は、博士論文提出後、著者が研究を重ねてきたものであるが、質量共に博士論文の加筆の範疇に収まるものではない。本書のタイトルが博士論文から変更された理由もそこにあるものと思われる。

以下、一部、評者の目にとまった点に所感を述べながら、各章の内容を簡略に紹介していきたい。

序章では、これまで包括的に論じられることのなかった『宝王論』と『念仏鏡』に、本書のタイトルにもある善導流という共通点を見出ししている。この善導流とは「従来の教理的な見方（道綽・善導流）」ではなく、儀礼や人師信仰などの諸要素を多角的に分析することで見出される「広義の善導流」と定義していることは注意される。

第一部の第一章「念仏三昧宝王論」研究史」では『宝王論』の研究史を網羅的に整理したうえで、中国学に基づく文献考証の必要性を指摘し、塚本善隆氏の提唱した統合仏教思想説を更に進め、飛錫による具体的な統合思想の実態や『宝王論』の撰述動機を明らかにしたうえで、『宝王論』の中国仏教思想史上の位置づけを明らかにすることを表明している。

第二章「念仏三昧宝王論」の撰述年代」では、先行研究を詳細に整理したうえで、仏教史書のみならず様々なテキストを網羅的に確認したうえで、『宝王論』の執筆が飛錫の円熟期であるようにも思われる。

第五章「念仏三昧宝王論」に見える飛錫の修道論」では、『宝王論』所説の「無上深妙禅門」が同論の全編を貫く修道論上の重要な概念であることを指摘している。そして『般舟三昧経』の異訳である『賢護経』『無上深妙禅門』と、そこに見出される「無上深妙禅門」の概念が『宝王論』の主題と大きく関わっており、それは廬山慧遠の「念仏三昧」と密着する要素であり、飛錫は『宝王論』においてそれらを統合する意図を有していたことを明らかにしている。しかもそれは、当時の浄土教家に内在していた禅淨一致の思想を、廬山慧遠を介して強調したものであるとする。なお「無上深妙禅門」の概念は法照の影響であり『儀礼仏教（法照）』↓「無上深妙禅門伝集法玉（理論化）」↓『宝王論』（諸宗に敷衍）という思想遍歴を想定」（一三五頁）している点も重要な指摘である。

第六章「念仏三昧宝王論」諸本の系譜について」では、『宝王論』の諸本の整理をしたうえで、中国と日本における流伝と刊行状況に関する非常に詳細な検討が行われている。当初、博士論文では本書の第二章と第三章の間に組み込まれていたが、本書では現在の位置に変更されている。このことにより飛錫の思想解明に関わる論旨がスムーズに展開しているのと同時に、本章が精緻かつ重厚な内容であるが故に、このような構成の変更が必要になったものと予想される。

あつた大暦九年（七七四）から大暦十四年（七七九）の間であつたことを明らかにしており、先行研究に比して大幅な撰述年代の限定をすることに成功している。

第三章「念仏三昧宝王論」と飛錫遺文の関連性」では、現存と散佚を問わず飛錫の遺文を収集整理したうえで、『宝王論』と関連させて検討を行っている。長安仏教界は安史の乱以降、分断化、分散化が進んだが、代宗期に実施された中央指導の統合政策を背景に復興を遂げた。飛錫は当時の仏教界の中枢において活躍をしていたが、時代の潮流と呼応するように、仏教の諸思想を統合する傾向を有していたことを明らかにしている。また遺文や『宝王論』の内容から、飛錫が中国仏教における儀礼面での調和の端緒となる役割を果たしていたことを指摘している。

第四章「念仏三昧宝王論」と廬山慧遠崇拜」では、唐中期から宋代にいたる時期に、浄土教の初祖としての確固たる地位を築く廬山慧遠が、崇拜の対象となる端緒が『宝王論』にあることを明らかにしている。なお同章において、かつて評者が『宝王論』巻中に「凡九十日常行道」とある一文の典拠を智顛『摩訶止観』と指摘したことは誤りで善導『般舟讚』であることとを指摘している（一〇三頁）。著者の指摘にも一理あるようにも思えるが、一方で飛錫は、梵金と共に天台法門、一心三觀を研習し、千福寺の法華道場において共に法華三昧を行じており、更に同文の直前に智顛の西方浄土への往生行が述べられ、その文脈の中で説かれることを考慮すると、著者が「誤謬である」（八四頁）と指摘するほど、飛錫の中で智顛『摩訶止観』

第七章「浄土教典籍としての『念仏三昧宝王論』」では、第一部のまとめを行っている。著者は『宝王論』の撰述の発端は、護国思想、儀礼実践と密着する「法華三昧」という通念を用いて緩やかに仏教思想の統合を図ったところにある。そしてその統合論理の中核は『般舟三昧経』や廬山慧遠の遺文に基づいた修禪を意識した学派的な「念仏三昧」であった」としているが、第一部の要点が端的にまとめられたものと言える。ところで本章では『宝王論』を善導流と位置づける点について述べられているが、陳揚炯氏が飛錫と法照について善導思想を淵源とした慧遠流に位置づけているのを承けながら、著者は「正確に言えば善導式儀礼が通奏低音として流れる儀礼面での善導流である」（二〇一頁）と指摘している。この善導式儀礼とは、廣川堯敏氏、齊藤隆信氏、中御門敬教氏の学説を承けながら、善導の儀礼が浄土教のみならず、後世の儀礼通念に影響を与えていたことを前提にしており（一四五頁）、『宝王論』においては「高声念仏」に善導以降の浄土教儀礼展開の一面面として見出し、飛錫が善導式儀礼を宣揚していた可能性を指摘している（一四六頁）。しかし評者は、この儀礼面での影響を善導流と捉える点について少し理解しにくく感じられた。もちろん序章に述べられている通り、狭義の善導流と広義の善導流は異なるものである。しかし単に影響があつたとするのではなく、「流」と名づけるには、そこに系統があり、自ずと他流派との区別が存在すべきであると考えられるからである。少なくとも狭義の善導流にはそれが存在する。そのように考えると、ここで述べられる善導流がどのようなものを意図しているのか、も

う少し説明が欲しかったようにも思われた。

第二部第一章の「念仏鏡」研究史」では、道鏡・善道撰「念仏鏡」の先行研究が網羅的にまとめられている。ここでも明らかなように「念仏鏡」に関する総論的な検討は本書が初めてであり、そのような意味でも本書が大きな価値を有するのは明らかである。

第二章「念仏鏡」の時代相」では、道鏡・善道の師である大行の遺徳を顕彰する目的で撰述されたものであるが、その大行の伝歴を明らかにすることで「念仏鏡」の時代相を明らかにしている。そして、大行は開元九年（七二二）までには没しており、天宝年間（七四二―七五六）頃、弟子筋である道鏡・善道によって撰述されたことを明らかにしている。また中央の意向を受けて教線の前面で活動する実践僧としての大行の姿を明らかにしている。

第三章「念仏鏡」引用の「法王本記」では、「念仏鏡」で仏滅年代を論じるなかで用いられる「法王本記」に着目し、同書が「法王本記東流伝録」に類するテキストであり、それによれば撰述時を天宝十載（七五二）という年代が導き出され、天宝年間末（一七五六）までの成立は確実であると指摘している。

第四章「唐中期における善導観の特質」では、道鏡と善道が「念仏鏡」において、浄土教家としての模範（鏡）として善導と、師の大行と重ね合わせるようにする意図があったことを明らかにし、また法照や少康らも教線の拡大のために善導の後継を宣揚していたことを明らかにしている。

界に果たす役割は大きなものがあると実感している。そのようななかで、評者の務めとして読了後に感じた一、二の疑問点について述べてみたい。

ひとつは本書の第一部に徹底する課題でもある統合仏教思想についてである。著者は塚本善隆氏の総合仏教思想説を一步進めて（二二頁）、それに修正を加えて（六八頁）自説を展開しているが、塚本氏の説と具体的にどのような違いがあるのか必ずしも説明が明瞭とは言えない。また統合仏教思想の語義定義も明瞭にされていないため、本書内で、同じ飛錫について「調和思想」（七七頁）と言ったり、澄観のことではあるが「融合思想」（六七頁）、また三階教のことではあるが「通仏教化（統合）」とあることから「統合」とは通仏教化を言うのかと想起されたりし、近似する表現も存在することから少々混乱するようになっている。また「統合仏教」「統合仏教思想」「仏教統合事業」「統合仏教事業」「統合仏教思想事業」など統合仏教に関する用語も多用いられており、そのことも理解を妨げる一因かもしれない。ともかく、用語の整理と、より明瞭な定義が行われることで、本書の価値がより大きくなることは間違いない。

更に本書の構成についてであるが、本書の詳細な検討の結果、これまで明瞭でなかった『宝王論』と『念仏鏡』の成立順序が「念仏鏡」→『宝王論』であることが明らかとなった。そのようななか、なぜ本書の構成もそのような成立順とならなかったのか疑問に感じられた。もちろんこれは第一部の博士論文が元となっているという本書の成立の過程が大きく関わっているものと思われる。しかし、本書の検討により『宝王論』と

第五章「念仏鏡」における対三階教姿勢」では、善導と大行の祖師化は、先行する三階教の信行の神格化を意識して推進されたことを明らかにしている。さらに三階教徒をはじめとする他学派との対論を端緒に、対抗措置の一環として両師の祖師化が推進されたことを明らかにしている。

第六章「念仏鏡」諸本の系譜」では、「念仏鏡」の諸本の整理をしつうえて、中国と日本における流伝と刊行状況に関する非常に詳細な検討が行われている。

第七章「善導阿弥陀化身説の起点としての『念仏鏡』」では、第二部のまとめを行っている。少康や法照が「念仏鏡」に起因する善導儀礼を導入することにより、長安における教線を広げた。また善導への尊崇が宋代より始まるものではなく、「念仏鏡」の善導の祖師化を起点として、法照・少康を經由して連綿の継続していたのであり、後世の善導阿弥陀化身説への展開にも繋がることを明らかにしている。

### 三

以上、本書の概観を行ってきた。これまで当該分野は塚本善隆氏や齊藤隆信氏等によって法照の研究を中心に行われてきたといえよう。しかし本書の刊行により、唐中期の浄土教の様相ならびに後世へ果たした役割など、新たに明らかになった面も多く、今後当該分野を研究する際には避けては通れない一書であることは間違いない。評者はかつて、本書にも紹介される大正大学総合佛教研究所の唐中期仏教思想研究会に所属し、『宝王論』の研究を行っていたことがあるが、それゆえに本書の学

「念仏鏡」の成立時期や同書を取り巻く時代相がかなり明確になったが故に感じる読了後の違和感に、終章で一言コメントがあっても良いようにも思われた。

以上が評者の感じた疑問点であるが、本書が飛錫『宝王論』ならびに道鏡・善道「念仏鏡」について初めて体系的な研究書として学界に資する価値に比べれば些細なことと言える。著者は近時法照の研究も進めつつあり、本書を基軸として、今後、唐中期浄土教の研究が更に進むことは間違いないであろう。